

CASE 2

## スカイプで 海外の学生たちと交流

外国人との接点が少ない地方でも、スカイプを使えば海外に近づける。環境や防災など世界共通の話題で、現地の生の声を聞き、伝え、尋ね、話し合うことで、英語を通じた学びの意欲が向上した。



ミステリー・スカイプでは、全員が参加できるように画面を大きなスクリーンに映す。



海外、とくに母国語が英語ではない国の生徒とつながることで、英語がコミュニケーションの手段となることが実感できた。



ドバイの授賞式に参加した堀尾さん(中央の列 右から2人目)。世界中から教師が集まった。

### 「地球ひろば」先生・生徒のお役立ちサイト

JICAは開発教育／国際理解教育の実践事例・学習指導案を提供しています。英語教科の実践事例・学習指導案は、こちらをご参照ください。



滋賀県立米原高等学校 教諭

堀尾美央(ほりおみお)さん

1985年、滋賀県生まれ。2009年より滋賀県の公立高校で英語科教員として教鞭をとる。14年、母校である滋賀県立米原高校に赴任。ICTツールを活用し、生徒たちの意欲を保ちスキルを伸ばす環境をつくり出す授業に取り組んでいる。

地方にいても  
海外との交流はできます!



## スカイプで 海外の学生と学び合う

最初の年は、子どもたちが作った京都の街を海外の小学生に送っただけだったが、翌年はおたがいが作った街で遊び、感想を交換し合った。海外の子どもたちとの交流は、これまでも無料の通話ソフト、スカイプで行っていたが、この授業では熱心さが違ったと正頭さんは言う。「マインクラフトを使うと共通の話題ができて、子どもたちが自然に英語を話す場面が生まれ、英語を話すことへのハードルが低くなったと思います」。

堀尾さんは、普通科英語コースの40人の生徒やE S S (英語研究会)の生徒たちを対象に、スカイプを使った海外の学校との交流を行っている。「米原では海外の人と直接触れ合う機会が少なく、英語を学ぶモチベーションも保ちにくい。スカイプという便利なツールを使うことで、英語を話して、通じる楽しさを生徒たちに体験してほしいと考えたのがこの授業のきっかけです」。

最初につないだのはケニアの高校。スカイプでつながり、相手が画面に現れると全員がスクリーンに釘付けになり、会話が盛り上がった。「これまでのどの授業の時よりも生徒が顔を上げていました」。堀尾さんは手応えを感じ、相手国がわからないままつなぎ、生徒たちが質問を合せて相手の国を推理する「ミステリー・スカイプ」や、ひとつのテーマで相手の国の生徒と一緒に共同授業、ボルネオの学校との環境授業など多彩な授業に取り組んできた。「地方が抱える教育の課題をあきらめず、テクノロジーの活用で課題解決に貢献した点が、GTPに選ばれた理由かもしれません」と堀尾さん。

今年4月、ふたたびボルネオの学校とスカイプでつなぎ、環境破壊について意見交換を行った。「たとえばバームヤシの栽培が環境破壊につながっていると日本では習ったけれども、現地の人たちにとってパームヤシは生きるために必要だとわかると、また見方が変わってきます。教科書の題材を使って海外とつながり、理解を深める——そんな授業モデルをつくっていききたい」と熱心に語る堀尾さん。スカイプと英語というツールで、地方から世界への扉を開いている。

## 世界につながる教室⑥

# 世界が認めた授業

## グローバルティーチャー賞

生徒やコミュニティに大きく貢献した教育者を世界中から選び、称えるグローバルティーチャー賞(GTP:Global Teacher Prize)。2018年、19年に入賞した二人の教師にそれぞれの授業についてうかがいました。

CASE 1

## マインクラフトを 活用した英語の授業

世界中の子どもたちに人気のマインクラフトというゲームを英語を使ってグループで進め、海外の小学生ともゲームを通して交流。複数の教科をまたいで学びを深めている。



ドバイで開かれた表彰式。ファイナリスト10に選ばれた壇上に立った正頭さん(左から4人目)。



2019年のGTPを受賞したのは、ケニアの地方の村で、生徒を経済的に支援しながら科学教科で目覚ましい教育成果を上げた教師。ドバイでは彼を含め、ファイナリスト10に選ばれた教師による模擬授業が行われた。

立命館小学校教諭 ICT 教育部長

正頭英和(しょうとうひでかず)さん

1983年、大阪府生まれ。京都市立立命館小学校、立命館中学校・高等学校を経て同小学校で教鞭をとる。ICT(情報通信技術)ツールを活用した英語の授業を推進するほか、全国で学級づくりや授業方法・小学校英語のワークショップなどにも取り組む。

ICTで英語を  
楽しく学びます



## 教育界のノーベル賞

英国の教育団体「パーキー財団」が2014年に創設したグローバルティーチャー賞(GTP)は、子どもたちが質の高い教育を受けられることを目指して、教育者の能力や地位の向上、支援のために創設された。教育界のノーベル賞ともいわれ、毎年世界中から数万人の応募がある。

その中から、地域の教育課題を乗り越えて生徒とコミュニティに貢献している、多くの人を巻き込んで周囲に影響を与えている、誰にでも再現できる授業に取り組んでいるなど、財団の基準に合致した授業を行っている教師50人が選ばれ、その中からファイナリスト10、そして最優秀教師としてグローバルティーチャーが決定される。



マインクラフトで作業する子どもたち。英語だけでなく、京都を学ぶ社会科や図工、プログラミングなど教科を横断する授業で、学びが深まる。

## ゲームで おたがいの街を紹介

京都市にある私立立命館小学校の教諭、正頭英和さんは、2019年のGTPでファイナリスト10に選ばれた。

正頭さんの専門は英語教育。小学校で必修科目になる外国語を、どうすれば子どもたちが楽しんで学べるかを考えていた。そんなとき、子どもたちの会話をきっかけに取り組み始めたのが、多様なブロックを組み合わせて建物や街を作るゲームソフト「マインクラフト」で京都の街を作り、世界に発信する授業だ。

はじめ、子どもたちはマインクラフトで遊べると喜ぶが、すぐに挫折を味わう。グループでオンライン上の街を作るため、たとえば「あそこは建てて」という指示では、ほかのメンバーに通じない。自分の意思をどうしたら正しく伝えられるのか、そもそもそのコミュニケーションのとり方を見直し、それを英語にするというプロセスを重ね、力をつけていく。

「京都の歴史を学ぶ社会科、街をデザインする図工、プログラミング、建物などを説明する英語など、複数の教科を横断して学びを深める授業になっています」と正頭さん。